

第 1 回 ESD・構成主義研究会概要報告

◇開催日時 平成 29 年 4 月 19 日（水）18 時～23 時

◇会場 中澤研究室

◇参加者 河野（附属小）、中澤

◇内容

テキスト『構成主義パラダイムと学習環境デザイン』久保田賢一、関西大学出版部、平成 12 年
第 1 章「マルチメディア時代の学び」

・現在の教育システムを支える暗黙の前提

「知識は客観的に把握できるもので、そのような知識の実体を捉え、分析し構造化することで、効率的な教授法を見つけることができる」

← 現行の研究授業はこの流れにある。

知識の構造図の作成・中心概念の特定

発問や板書へのこだわり

効率よく「教えること」に焦点がある。

・実際に使う状況から切り放された知識は死んだ魚の肉の塊と同じになってしまう。

← 受験が終わると「剥落する」知識

・情報社会の新しい状況に対応するためには、工業社会で考えられていたような「状況から切り離されたパッケージ化された知識」では役に立たない。

・情報社会に合った知識とは、実践のなかで柔軟に活用できる知識である。学習とは、わたしたちの置かれている状況の中で、人が状況と相互作用を持ちながら、問題を見つけ、その問題を解決するために互いに協力し合うことで実践に結び付けていくプロセスそのものである。

・学びの基本は、人と人とのコミュニケーションにある。その方法としてディベートや討論、話し合い、発表を中心とした参加型の学習を活用する。

第 2 章「教育理論の哲学的前提」

客観主義の理論	構成主義の理論
<ul style="list-style-type: none"> ・教授に重点が置かれる ・事前に教師によって生徒のレベルに合った目標が決められる。 ・教授内容を分析、構造化し、教師から生徒への知識・技能の伝達を効率的に行うことに関心が払われる。 ・与えられた知識を吸収することに重点が置かれている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習に重点が置かれる ・学習者を取り巻く社会的な状況、実際の日常生活に関連する意欲、他者との相互作用などの実体験を通して学習することに関心が払われる。 ・学習者自らが問題を見つけ、解決方法を探ることのできる力、メタ認知能力を養うことに重点が置かれている。 ・ほしい情報を必要に応じて探索できる能力（しかし、知識があつてこそ、情報を関連付けたり、選択したりして、解決に向かえるというものだと思うが）

○客観主義の教育理論の概要

- ・「科学的な方法」を用いること

複雑な教育のプロセスをいくつかの部分に分け分析する手法により、誰でもが利用できる道具として活用する

同じ状況下で行われた教育方法は同一の結果をいつももたらさなければならない。

- ・学習者はもともと受動的であり、あまり有能でないと見なされる
- ・教師の仕事は「知識を伝達する」ことであり、伝達した知識量を測定すること
 - ← 研究者はパラダイムの枠の中の概念や理論を当然のこととして無自覚に利用しているため、客観主義のいう「中立的な」観察というものは存在しないことになる

○構成主義の教育理論

- ・学習者の理解の仕方に焦点を当てる
- ・学習とは、人がその心の中で世界を作り出す過程にはかならない
(人は自分の見たいものを見る、聞きたいものを聞く(「問題解決の心理学」参照))
- ・知識は人間の個人的な体験、属する文化等と切り離すことはできない
- ・各人はそれぞれ世界を違った形で理解する
- ・学習者がどのように主体的に意欲をもって学習活動に関わっていくかというところに焦点が当てられる。(知識よりも人間にフォーカス)

(1) 学習とは学習者自身が知識を構築していく過程である。

学習は暗記することではなく、情報を解釈すること。様々な知識を関連付けて構造化すること
学習者による納得＝個人的解釈

(2) 知識は状況に依存している。

知識を活用するためには、活用イメージを持つことが必要である。それが知識の活用場面の中で学ぶことの一つの意義

(3) 学習は共同体の中で相互作用を通じておこなわれる。

他の学習者との社会的な関わりあいが、学習共同体に属しているという一体感を生み出す
知識と知識のおかれている社会的文脈で学習を理解する

共同体の相互作用によって間主観的に知識を構築することができる

- ・個人の思い込みではなく、クリティカルシンキングによる汎用性のある知識を構築を促す
- ・ZPDの効果の利用
- ・主体的で有能な学習者は外界に積極的に働きかけをおこなって学習するという前提

○佐伯：これから所属しようとする社会で真剣に取り組まれている「ほんもの」の実践活動に学習者自身もその部分に関わり、活動に参加しているという予見が学習の原動力になる。←あこがれ

○ピアジェ：自分の意見を説明したり、教えようと試みるうちに、自分自身でも曖昧であった知識が次第に明確になり、理解を進める。

○ヴィゴツキー：グループ内の仲間同士の相互作用によって、知的関心が高まり、より深い理解を促す。：社会的関係のなかでの学びの重要性

関心を共有するが、考え方の異なる他者とのやりとりが理解を深め、学習を促す。

学習の社会的側面

所属したい社会への入門チケット

社会的文脈の中で学ぶことで、活用できる知識が獲得される：間主観的学習の効果

○稲垣・波多野

- ①まちがうことを尊重する
- ②探索することを奨励する
- ③学習者相互のやり取りをうながす。
- ④教師の役割は援助であり、学習者自らが知識を構成していくのを「助ける」ことが求められる

学力論争

- ・客観主義の哲学は、条件が同じならば同じ結果を導く「再現性」、定量化することにより測定可能となる「信頼性」、適当な変数を制御することにより学習効果を見通す「予測性」という価値観を重視
- ・構成主義の価値観：協同性、自立性、内省性、やる気、関わり性、多様性といった価値観を重視
- ・現在オン学校という枠組みは、パラダイム論の視点からは、構成主義の価値観との整合性が十分にとれていない（特に目標と評価・目標が教科内容におさまらない場合、だれが評価できるのか）

パラダイムの基本的前提

哲学的疑問	客観主義パラダイム	構成主義のパラダイム
存在論	客観的「真理」が存在	真理は人間の心の中で社会的に形作られるため、多様で主観的である
認識論	対象から離れて実験や観察を行う	知識は知る人と対象の相互作用の中で構成される
方法論	仮説を立てて条件を制御し検証	知識は体験と内省の繰り返しの中で構成される
人間論	人間も自然法則に従う受け身な存在	積極的に対象と関わる能動的な実体

※もし教師が教えた内容にはずれないように、巧みに議論の方向を自分の「正しい答え」に近づけようと誘導するなら、それは構成主義の協同学習の方法とは言えない。

※教育という活動は、教師の持っている教育に対する「考え方」「価値観」によるところが大きい

※教師は、まわりとの相互作用を通して主体的に取り組み、知識を構成していくのだという姿勢をもつ



附属小に来られた河野先生と 2 人で始めました。研究仲間を募集中です。